

目次

第一章	豊かな自然と図鑑たち	1
第二章	博物学者になりたい	15
第三章	進化と行動研究への足がかり	41
第四章	ニホンザルの研究と「種の保存」の誤り	67
第五章	アフリカの日々	85
第六章	群淘汰との闘い	109
第七章	博士論文を書く	121
第八章	ケンブリッジへ	131
第九章	ケンブリッジ大学とイェール大学	143

第十章	ダーウィンとの出会い	157
第十一章	科学とは何か？	175
第十二章	人間の進化と適応を考える	189
第十三章	動物の世界から性差を考える	203
第十四章	ヒトにおけるセックスとジェンダー	223
あとがき		245
参考文献一覧		251

第一章

豊かな自然と凶鑑たち

紀伊田辺の豊かな自然と蛇腹状の凶鑑

小さいときから、とても生き物が好きだった。なぜ、何がそんなに好きだったのかはよく覚えていないのだが、まずは、草花や貝殻の美しさに魅了されていたような気がする。ツクサの花びらの形とその素晴らしい青い色、磯の岩場に張り付いているヨメガカサの丸い形と、薄いピンクと茶色の模様、こんなものをたまらなく美しいと思った。

私は東京で生まれたのだが、二歳のときに母が結核になって長期入院してしまったため、親戚の家々にあずけられて転々とした。父は銀行員だったので、仕事が忙しく、働きながら小さな私を育てることは無理だった。結局のところ、和歌山県の紀伊田辺に住んでいた、父の両親である祖父母の家に引き取られることになり、三歳から五歳までを田辺で過ごすことになった。そのころの田辺の家は海に近く、裏には川も山もあり、豊かな自然に囲まれていた。

私は両親とは別れ、父方の祖父母の家で暮らすことになったのだが、とくに寂しいとかつらいとか思った記憶はない。田辺の家には、父方の祖父母、父の姉（戦争未亡人、



3歳のとき(1956年のお正月、紀伊田辺にて)、前列、私と祖父、後列右二人が南方熊楠の娘である文枝さん夫妻

中学校の教師)とその一人息子(当時一四歳)、父の妹(結婚したが離婚して独身、小学校の教師)が住んでいて、結構にぎやかだった。私はみんなに可愛がられてすぐにこの環境に順応した。

その家には白い犬がいたが、あまり印象に残っていない。今の私は犬も猫も大好きだが、当時の私はぬいぐるみのクマの方がずっとお気に入りだった。この犬ともっと

密接な関係を築いておけばよかったと、今は思うのだが、私のその後の人生における生物学への興味に、残念ながら、この犬はなんの影響も与えていない。

小さいころの私を生き物の世界の楽しさへと導いてくれたのは、何冊かの図鑑である。最初のものは、紀伊田辺のおばたたちが持っていた、薄い小さなものだ。これは、本というよりは、蛇腹状に折り畳んだ紙の束であり、そこに、植物や魚や貝の絵が描いてあった。

表からめくって行って終わりになると、今度はひっくり返して裏側をめくっていく。このように紙の両面に印刷してあった。なんだかごわごわした、茶色っぽい厚い紙だった。

父の姉であるおばが中学校で教えていたので、その中学生用の教材の一つだったと、後年、彼女が言っていた。その図鑑自体はもうどこかへ行ってしまったし、それ私に見せてくれたおば自身の記憶ももう曖昧である。このおばも先年一〇〇歳で亡くなった。下の妹である方のおばはずっと以前に亡くなった。

私はまだ、たった四歳ぐらいだった。しかし、何にそんなに惹きつけられたのか、私はすっかりこの図鑑がお気に入りになって離さなかった。おばたちや祖父母に読んでもらって、そこに書かれた植物や動物の名前をみんな覚え、飽きもせずに日がな一日、ひっくり返して見ていた。今でもその描画を鮮明に覚えているのは、「センブリ」という植物と、「レイシ」という貝である。センブリのすつくと伸びた茎と白い花、レイシのぶつぶつした紺色の貝殻に鮮やかな濃いピンクの身……。今でも目に浮かぶようだ。

まだ小さかった私が、一日中、この中学生用の図鑑ばかりを見ているので、おばたちは少し心配し、もっとほかのことをさせるべきだと考えた。そして、ある日、この

図鑑を隠してしまったのである。朝起きてすぐにそのことに気づいた私は、家中をあちこちと探し回ったそうさ。そして、最後に、「誰か、私の本を隠したんじゃないの？」とおばに詰め寄ったのだそうである。これで彼女たちは降参して、私に図鑑を返してくれた。

当時の紀伊田辺はきれいな小さな町で、海岸に今のようなテトラポッドなどはまったくなく、海辺には松の木が何本も生えていた。海に行くまでの道には草花も昆虫もあり、磯には貝やイソギンチャクがいて、四季折々にいろいろと見たり触ったりすることができた。

あのころはまだ小さ過ぎたから、実際に見たものを図鑑の絵と照らし合わせて調べることがしなかつたが、この世に存在するさまざまなきものに名前がついていることには感動した。何度思い返しても、あの図鑑が、私が生物学者になろうと思った最初のきっかけであったのだと思う。

お気に入りだった図鑑シリーズ

母の結核は結局治って、ある日、私は東京に帰ることになった。それまでの毎日、田辺の家でみんなに可愛がられ、楽しく暮らしていたが、毎月、母に手紙を書かねば

ならなかった。まだ四、五歳だったのだが、一応ひらがなは書けたので、緑色の太いクレヨンで手紙を書いた。しかし、小さい子どものこと、数カ月もすれば母の思い出は忘れ、なにか、知らない女の人に手紙を書くように強いられていた感じだった。

父と母が私を迎えに来た日、私は丸二年以上も祖父母の家で育てられたのだが、その割にはなんの感傷もなく両親に連れられて東京に帰った。これが小さな子どもの薄情さなのだろう。もちろん、後年、たくさんの恩義を感じ、いつでも田辺の日々を懐かしく思い出すのではあるが、あときは、祖父母たちと別れていくことに関し、何の思いもなく、ただただ、両親と一緒に暮らすようになったことを楽しんでいた。

こうして、東京、千駄ヶ谷の三菱銀行(現・三菱UFJ銀行)の寮での生活が始まった。東京は、紀伊田辺とは違って大都会である。それでも、一九五〇年代の渋谷区千駄ヶ谷は、今から見ればのどかな生活だった。幼稚園に通う道筋には、四季折々に草花が生え、野良犬の死骸がころがっていたりもした。

千駄ヶ谷小学校に入学したが、二年生のときに、両親が東京都小金井市に新しく家を建てて引っ越したので、東京学芸大学附属小金井小学校に編入した。

小学校二年生のとき、講談社の子ども用の図鑑シリーズを買ってもらった。これは今でも全巻、なくさずに持っている。最初に手にしたのは、『昆虫の図鑑』と『植物



『昆虫の図鑑』と『地球の図鑑』

の図鑑』で、すぐに大のお気に入りになった。以来、おとなになるまで何度開いてみたかわからない。大学三年生のときから、千葉県山奥で野生ニホンザルの研究をするようになったが、これらの図鑑は、実際、このときにも役立ったのである。

この図鑑だが、写真は一つも入っていない。全部、画家の描いた絵である。『昆虫の図鑑』のチョウやガのところには、幼虫の絵もあり、幼虫の食べる植物も描いてあった。美しいギフチョウの絵の下には黒い幼虫がいて、そこに「幼虫はカンアオイの葉をくう」と書いてあった。ヒメギフチョウの絵の下にも同じような黒い幼虫がいて、そこには「幼虫は

ウスバサイシンの葉をくう」と書いてあった。私は、カンアオイもウスバサイシンも知らなかったが、こんな文句を全部暗記していた。

この図鑑シリーズは、中の挿し絵に表されている通り、明らかに小学生が対象であった。たとえば、『昆虫の図鑑』には、昆虫の絵の脇に、半ズボンに野球帽をかぶった小学生が捕虫網を持って昆虫採集に出かけている絵などが挿入されてあった。そして、カラーでいろいろな植物や動物の種が分類されて描かれているページがほとんどなのだが、巻末に、少し難しい解説のページがあった。

たとえば、『植物の図鑑』の巻末には、花が茎についている並び方を示す「花序」の説明や、おしべやめしべの構造、そして、「顕花植物」と「隠花植物」やコケの生活史の区別の説明まであった。この図鑑からは、こういった言わば理論的な説明があることも知った。当時、その意味はまだよくわからなかったが、単に種名がわかるという以上の、なんとなく奥の深いものを感じた。こうして何年もの間、この図鑑シリーズを隅から隅まで何度も読んでいたので、中学校に入って、生物の時間に、たとえばめしべの「柱頭」などについて習ったときには、その内容は全部すでに知っていた。実は、つい最近、芝生の手入れをしていたところが、指に激痛が走った。梅の木の下だったのだが、イラガの幼虫に刺されたのだ。短いトゲだらけの触角のようなもの

が何本も生えた、黄緑色の小さな毛虫である。このとき、これがイラガの幼虫であると瞬時にわかったのは、「こいつ」が、小さいころから見つけてきた『昆虫の図鑑』の絵そのものだったからだ。痛みはひどいのだが、本物の「こいつ」に出会えて識別できたことは嬉しかった。

さて、その次に手に入れたのが、『地球の図鑑』と『鳥の図鑑』である。これらもすぐにとりこになったが、とくに『地球の図鑑』の魅力は素晴らしかった。今は絶滅した恐竜やさまざまな化石の世界には、まさにロマンがあった。『鳥の図鑑』の方はと言えば、ただ、鳥という生き物の美しさのとりこになった。後年、バードウォッチングが趣味の一つになるが、その下地だったのだろう。

『地球の図鑑』では、最初のページを開いてすぐのところにある、「魚から人間まで」という地質年代にそつての脊椎動物の進化を描いた年表に魅せられた。カンブリア紀、オルドビス紀、デボン紀などというエキゾチックな名前と、アングピラス、イクチオステガなどというわけのわからない名前の生き物の世界があることを知って、本当におもしろかった。

アングピラスの絵は、なんだかロボットみたいな薄緑色の丸太のようなものにとんがり鼻がついていて、「あごのない甲胃魚^{かつちゆうぎよ}。やつめうなぎに似ていました」と書いて

ある。甲冑魚とはなんなのか知らなかったが、この図鑑のあとの方に説明があったので、なんとなくわかった。しかし、「あごがない」とはどういうことなのか、あごがなくどうして口が閉まるんだろう、という疑問はついに解けなかった。

この年表は、こうしてだんだん時代が進むとともに魚類が陸に上がり、爬虫類になって、三疊紀のころには、デルタセリデウムというイヌのようなのが出てきて、「木の上に住むけもの祖先」とある。次の白亜紀には「きつねぎるの祖先」。さるの最初のものです」という説明の横に、リスが必死になって幹にしがみついているような絵がある。

それから、第三紀になると「ドリオぎる」が出てきて、これが「歯の形や並び方から、ゴリラや人間の祖先であることを示している」という説明。そして第四紀には「オーストラリアぎる」というのがあって、「ちょうどさるから人間に移る中間のさるです」という説明がある。そこに描かれているのは、全身が毛でおおわれ、ぼうぼうの髪をはやし、腰を曲げて右手に棍棒を持った、いわゆる「原始人」なのだ。その次が「北京原人」で、次が「クロマニヨン人」。そして、現在のところに描かれているのは日本のお百姓さんで、「このように、ほぼ四億年もかかって人間ができあがりました」という説明である。